

## 森へおいでよ ～ずっといたくなる森へ～

## 長野県最南端の小さな村の今とこれから

○太田 真智子

今村 豊 (根羽村森林組合)

中本 貴規 (飯田女子短期大学)

## 1. はじめに

長野県根羽村は県の最南端で、愛知県豊田市との県境に位置する。人口 883 人、村の面積のうち約 9 割を森林が占める自然豊かな地域である。国土交通省より一級水系として指定されている「矢作川」の源流地であり、川を起点として下流地域との支え合い・連携を推進している。その中で、愛知県安城市とは「矢作川水源の森分収育林」を通じた連携があり、平成 3 年から始まり、全国初の自治体間「森林整備協定」を締結している。安城市との連携は分収育林だけではなく、市内在住の親子を対象とした「山村留学制度」も行われている。

山村留学制度を利用し、根羽村に在住する多くの親子は、子どもと自然との関わりを重要視する傾向が強く、豊かな自然環境の中で子育てを希望する保護者が多く見られる。しかし、昨年は新型コロナウイルス感染症の拡大により、村内及び周辺地域で行われる親子での自然体験活動は年度当初からことごとく中止になり、山村留学制度を利用した多くの親子はやり切れない思いを抱えていた。

## 2. 自然体験活動実践に向けて

自らも山村留学制度を活用し、自然豊かな土地で子育てを考える中で、子どもたちと自然をつなげるために、さまざまな機関との連携を模索した。その中で森林組合員とのつながりができ、子どもたちと自然をつなげるため、それぞれが持つ体験活動への考えの共通理解を得ることができた。

根羽村への山村留学制度を利用した家庭は今年度 5 世帯あり、その多くが自然豊かな土地での子育てを希望し生活している。子育て世帯への働きかけやそれぞれの願いを集約するような形でヒヤリングを行い、根羽村での自然体験活動への保護者の願いを明白にし、実施に向けた課題を追求することにした。その結果、各世帯において共通する思いは多く、自然を活かした子育てを望む声があった。しかし、子どもにとって地域で行う自然を活かした活動がどのような影響をもたらし、どのような効果を得られるのか(子どもにとってどうなのか)が課題としてあがった。そのため、信州型やまほいく認定園(高遠第2第3保育園、野あそび保育みつけ)への視察や保育参加を行い、子どもの姿や保育士の関わりから自然保育を学び、そこから得た視点を踏まえ実践を行った。また、根羽村森林組合とともに連携し、森林事業を行う専門家からの意見も伺うこととした。

## 3. 実践と視察

	実践	視察	講習会等
6月	茶臼山原生林歩き (写真1)	伊那市立高遠第2第3保育園	
7月	山歩きと森遊び (写真2)	伊那市立高遠第2第3保育園 飯田市野遊び保育みつけ(4日間)	ツリークライミング講習受講
8月	川遊び(2回)		
10月			小児救急法受講
11月	矢作川水源の森	飯田市野遊び保育みつけ	
1月	そり遊び		



(写真1 茶白山原生林歩き)



(写真2 山歩きと森遊び)

## 4. 実践や園への視察、森林組合との連携で見えてきたもの

### 4-1 実施の成果と課題

- ・子どもたちの笑顔が多く見られ参加者は満足していた。子どもたちや保護者から四季折々の自然体験活動を今後も楽しみにする声が多く聞かれた。
- ・子どもたちは家から見える山に実際に足を踏み入ると違う世界に来たかのように歓声を上げ、心も体も動かしていた。大人も子どもも地域の自然に親しみ、地域の人の暮らしや信仰を身近に感じ、一緒に楽しみながら好奇心や探求心を爆発させていた。
- ・未就園児から中学生までの異年齢による交流が生まれたが、年齢による遊びや歩くペースの差が大きく出たり、遊ぶ時間が充分でなかったりした。今後はねらいを主催者や参加者が話し合っ決めて、プログラムを未就園児・小中学生に分けて、どの子どもも夢中になって遊べるような時間や場所の保障、遊びの環境構成が必要であることが考えられた。
- ・活動範囲に対し、下見をする人数が少なかった。今後は人数を増やし危険の予知や予測に観点を置きながら、実施していく必要がある。また、救急車がない根羽村では小児救急法受講者の同行は必要と考えられる。

### 4-2 森林組合との連携

- ・森林組合は森林の維持管理を専門としていることから、その土地の地形や動植物等に関する知識や技術が豊富である。また、学童期の子どもたちの森林を活かしたワークショップの開催等も積極的である。しかし、未就学児や支援を必要とする子どもに対して関わる経験が少なく、対象が限られていることが課題として見えた。また、活動上最大限に留意すべき事項として「安全管理」が上がり、森林組合と共に安全への意識付けやもしもの時の対処方法を学び、常にスキルアップしていかなければならないことが明確になった。

## 5. まとめ

- ・さまざまな自然体験活動を通して子どもたちは五感を使って自然に親しみ、心や体を動かし、興味や関心を広げながら生き生きと遊んでいた。これらの経験を土台にし、自然環境の保護や保全に関心を持ち寄与する大人になっていくと考えられる。
- ・今後はさらに環境教育の意義や大切さを多くの方と共有し、親子共に心の財産となるように村の豊かな自然を活用した自然体験活動をしていきたい。
- ・根羽村から安城市に戻ってからも矢作川下流域に暮らす‘森の民’として自然体験活動を通じた交流ができるように、豊かな自然を体感し、このような実践を積み重ねたい。

参考文献 [1]公益社団法人国土緑化推進機構 編：森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック，風鳴舎（2018）

[2]能條歩 編：とぎすまそう！安全への感覚，NPO 法人北海道自然体験活動サポートセンター（2018）